The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第二言語としての日本語の「てくる」の習得ー中国語を母語とする日本語学習者の場合ー
Author(s)	周, 利
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101743
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　周　利　　）	
論文題名	第二言語としての日本語の「てくる」の習得 ―中国語を母語とする日本語学習者の場合―

論文内容の要旨

日本語の「てくる」は、空間的移動や時間的変化を含む多様な意味機能を持つ重要な文法項目である。しかし、日本語教育現場では、学習者による「てくる」の脱落や他の文法項目との混同などの誤用が頻繁に見られる。これらの誤用の背景にはさまざまな要因が関与しており、特に学習者の母語の影響が重要な要因とされている。本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下は学習者と省略する）における「てくる」の習得状況とその影響要因を明らかにすることを目的としている。この目的を達成し、また、従来の研究に残されている課題を解決するために、本研究では「対照研究→誤用観察→検証調査」という 3 つの手法を統合した「三位一体の習得研究」（張 2010a、2010b、2010c、2011、2015 ほか）に基づき、以下の 4 つの研究課題に取り組んだ。

研究課題Ⅰ　日中対訳コーパスの共起頻度を基に、日中対訳関係の解析手法を模索し、「てくる」が中国語とどのような日中対訳関係を持つかを再検討する。

研究課題Ⅱ　I-JAS を用いて、「てくる」を使用すべき場面において学習者がどのような使用傾向を示すか、さらにその使用傾向が日中対訳関係にどのように関連しているかを明らかにする。

研究課題Ⅲ　学習者の日本語の語彙知識と文法知識が「てくる」の習得にどのように影響しているかを明らかにする。

研究課題Ⅳ　学習者の母語である中国語と「てくる」の各用法の特徴が「てくる」の習得にどのように関わっているかを明らかにする。

本論文は全 8 章で構成されている。第 1 章では研究の目的や方法を説明し、第 2 章では先行研究を概観した上で、本研究で取り組む 4 つの研究課題を提示した。第 3 章から第 7 章では、「三位一体の習得研究」の枠組みに基づき、これら 4 つの研究課題を詳細に分析した。第 8 章では、各研究課題の分析結果を総括し、本研究の成果と今後の展望を述べた。以下では、この 4 つの研究課題に焦点を当て、それぞれの内容や相互の関連性、さらに得られた結果について示す。

本研究の研究課題Ⅰ（第 3 章）では、日中対訳コーパスの共起頻度を基に、従来の対訳関係の解析手法を検証するとともに、新たな解析手法を提案した。この新たな手法により「てくる」の空間移動用法における日中対訳関係を再考察した。従来の *T* スコアと *MI* スコアを基にした解析手法は、特定の主要な対訳関係を示すのに有効であるものの、全体像を捉えるには限界があった。そこで本研究では、すべての日中対訳の共起頻度を活用するコレスポンデンス分析を採用し、「てくる」の空間移動用法における日中対訳関係を 5 つのパターンに分類した。この 5 つの分類に基づき、「てくる」の空間移動用法における日中対訳関係について、次の主要な特徴が明らかになった。第 1 に、同時移動用法と移動の方向づけ用法では、「着点/方向」が明示されない場合は明示される場合に比べて、「てくる」は中国語の「来」を含む対応類に訳されやすい傾向が確認された。第 2 に、「てくる」の空間移動用法は「一対一」の対訳関係だけでなく、「一対複数」の対訳関係を持つことが示され、用法ごとの多様な対訳の可能性が明らかになった。第 3 に、用法ごとに「てくる」が中国語の「来」を含む対応類に訳されやすい度合いが異なることが明らかになった。さらに、従来の対照研究の知見を踏まえ、空間移動用法に限らず、逆行態用法とアスペクト用法でも、用法ごとに多様な日中対訳関係が存在することが示唆された。

研究課題Ⅱ（第 4 章）では、学習者コーパス（I-JAS）を用いて、「てくる」を使用すべき場面における学習者の使用傾向を明らかにし、日中対訳関係との関連性を考察した。その結果、学習者は日本語母語話者に比べて「てくる」の使用頻度が低く、特に後続の機能語を伴わない「本動詞タイプ」（例 :「起きた」「起きました」）を多用する傾向が確認された。また、空間移動用法と比較してアスペクト用法の使用頻度が低いことも明らかになった。さらに、空

間移動用法では、「着点/方向」が明示されない同時移動用法と「着点/方向」が明示されない移動の方向づけ用法は、「着点/方向」が明示される移動の方向づけ用法よりも「てくる」の使用頻度が高い傾向が見られた。一方、一方的継起移動用法では「てくる」の使用が少なく、主に「本動詞タイプ」が使用されていた。これらの使用傾向には日中対訳関係が大きく影響しており、中国語の「来」を含む対応類に訳されやすい用法では「てくる」の使用率が高いことが確認された。このことから、「てくる」の習得には学習者の母語が重要な要因であることが示唆された。ただし、学習者コーパスを用いた分析は産出データに基づくため、使用されなかった用法の習得状況や影響要因の分析には限界があることが指摘されている。また、学習者が誤用を避けるために「てくる」の使用を回避する可能性があり、理解レベルと産出レベルの間にギャップが生じる可能性も考えられる。これらの課題を補完するために、文法性判断テストなどの調査手法を導入し、学習者の理解レベルを対象とした検証調査が必要であると考えた。そこで、第 5 章では「てくる」の理解を問うテストを作成し、第 6 章では中国の大学で日本語を専攻する学習者 154 名を対象に「てくる」テスト、語彙テスト、文法テスト、ダミー問題を含む合計 140 問のテスト調査を実施した。

研究課題Ⅲ（第 6 章）では、テスト調査を通じて収集した 154 名の学習者データを基に、語彙知識と文法知識が「てくる」の理解に与える影響を考察した。まず、「てくる」の 3 つの上位分類用法（空間移動用法、逆行態用法、アスペクト用法）の正答率を対応ありの一元配置分散分析で比較した結果、有意差が見られた（空間移動用法＞アスペクト用法＞逆行態用法）。この結果から、空間移動用法が最も理解されやすく、逆行態用法が最も難しいことが示された。次に、「てくる」の 3 つの上位分類用法における語彙知識・文法知識との相関関係を比較した。その結果、いずれの用法でも語彙知識と文法知識との間に有意な相関が見られたが、その強さは用法によって異なった。さらに、語彙知識と文法知識で分けたそれぞれの上位群・中位群・下位群の得点を対応なしの一元配置分散分析で比較した。その結果、語彙知識と文法知識が豊富なほど、「てくる」の 3 つの用法の理解が進むことが示された。ただし、各用法の理解には語彙知識と文法知識が異なる役割を果たしていることが確認された。具体的には、空間移動用法とアスペクト用法の理解には語彙知識の方がより重要な役割を果たしている一方で、逆行態用法の理解には文法知識の影響がより強いことが明らかになった。最後に、「てくる」の理解における語彙知識と文法知識との因果関係を考察するため、「文法先行の逐次モデル」「語彙先行の逐次モデル」「並行モデル」の 3 つを想定し、構造方程式モデリング（SEM）で比較検討した。その結果、「文法先行の逐次モデル」が最も収集したデータに適合することが示された。このことから、「てくる」の理解においては、文法知識の向上が語彙知識の向上を促進し、さらに語彙知識の向上が「てくる」の理解を促進させるという因果関係が存在することが明らかになった。このような逐次的な因果関係は、学習者が「てくる」を学ぶ過程を反映していると考えられる。特に海外の日本語教育環境においては、まず文法のルールを学び、その後語彙を応用し、練習を重ねて段階的に「てくる」を学習するアプローチが「てくる」の習得プロセスに影響すると考えられる。

研究課題Ⅳ（第 7 章）では、TDAP を用いて「てくる」の 26 項目（問題）について項目分析を行い、「てくる」の理解における学習者の母語である中国語・各用法の特徴との関係を考察した。その結果、項目難易度（DIFF：正答率とも呼ぶ）から「てくる」の 26 項目が全体的に学習者にとって難しいことが示された。特に中位/下位分類用法の間で難易度に差が見られた。また、実質選択肢数（AENO）や各選択肢の選択率からは、学習者が「てくる」を他の文法項目と区別するのが難しい傾向が示された。これらの中位および下位分類用法間の難易度の違いや他の文法項目との混同から、「てくる」の理解には、学習者の母語である中国語や各用法の特徴が深く関係していることが明らかになった。具体的には、まず「てくる」の理解における学習者の母語である中国語との関係については、中国語の「来」を含む対応類に訳されやすい用法ほど学習者が「てくる」を理解しやすいことがわかった。これは、学習者が母語の知識を活用することで「てくる」の理解を促進しているためと考えられる。一方で、往復的継起移動用法では、「てくる」の代わりに「ていく」が選ばれやすい傾向が見られた。これは、日本語では「てくる」が往復的な移動を含意しているのに対し、中国語では「去（行く）」を明示するのが一般的であるためだと考えられる。また、逆行態用法では、「てくる」よりも「本動詞タイプ」が選択されやすい傾向が見られた。これは、中国語では逆行態を表す「V 来」といった標識が必ずしも必要ではないため、学習者が「てくる」を使用しない傾向があることに起因している。次に、「てくる」の理解における各用法の特徴との関係については、空間移動用法において「話者への移動」を強く感じる場合に「てくる」が選ばれやすいことがわかった。ただし、前項動詞と後項動詞「来る」との緊密性や、前項動詞の種類、「着点/方向」の明示の有無が選択に影響を与えることも明らかになった。逆行態用法では、話者への方向性が強く、受影性の度合いに応じて選択肢が変化する傾向が見られた。具体的には、受影性が低い場合には「てくる」の代わりに「てくれる（受益）」、受影性が高い場合には「てくる」の代わりに「られる（受身）」が選ばれやすいことがわかった。この結果は、学習者が「てくる」、「てくれる」、「られる」の統語的・意味的な違いや、「てくる」の逆行標識としての中立/受害の意味機能を十分に理解していないことを示している。また、継続型ア

スペクト用法では、「てきた」と「ていた」の混同が見られ、「てきた」が現在も動作が続いていることを含意している点を学習者が理解していないことが判明した。これらの結果から、「てくる」の理解においては学習者の母語である中国語、さらに各用法の意味的・統語的特徴が重要な要因であることが明らかになった。

このように、本研究は「三位一体の習得研究」の枠組みに基づき、「てくる」の習得状況とその影響要因を明らかにした。その結果、「てくる」の習得には用法ごとに習得の違いが見られ、他の文法項目との区別が難しい点も確認された。また、これらの習得状況は、学習者の母語である中国語の影響に加え、語彙知識・文法知識、さらには各用法の意味的・統語的特徴とも密接に関連していることが明らかになった。さらに、「てくる」の習得には用法ごとに影響する要因やその程度が異なり、それらの要因が相互に作用しながら習得プロセスに影響を及ぼしていることが示唆された。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　周　利　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	今井　忍
	副 査　教 授	小森　万里
	副 査　教 授	山川　太
	副 査　京都大学　准教授	大和　祐子
	副 査　教 授	岸田　泰浩

論文審査の結果の要旨

日本語の「てくる」は意味用法が多様であることから、日本語学習がある程度進んだ学習者であっても、「てくる」が適切な意味用法で使用できなかったり、「てくる」を使用すべき場面で回避したりする学習者は少なくない。審査対象論文は、このような日本語の「てくる」と中国語の「V来」等との意味的な対応関係の複雑さが、中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」習得を困難にする要因の1つとなると考え、まず、「てくる」と中国語の「V来」等との対応関係を整理し、次に、中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の誤用分析を行い、最後に 中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の理解とそれに影響する要因を検証した論文である。

本審査対象論文は全8章で構成されている。第1章では、研究の背景と本研究の枠組み「日本語教育のための対照研究」および「三位一体の習得研究」について解説した上で、本研究の目的と方法がまとめられている。ここでは、特定の母語の日本語学習者を対象とした習得研究を行うことの意義を強調するとともに、張（2010）が提案する「対照研究→誤用観察→検証調査」の3つの手法を組み合わせた「仮説検証型習得研究」が、本研究で明らかにしようとしている中国語を母語とする日本語学習者を対象とした「てくる」の習得研究の手法として適当であることを説明している。中国語母語話者を対象とした「てくる」の習得研究はこれまでも行われており、実際に学習者による「てくる」の誤用も報告されているが、いずれの研究も学習者の「てくる」の習得を包括的に明らかにしているとは言い難いと指摘している。この点を踏まえ、本研究では「てくる」の習得とその影響要因、特に学習者の語彙知識と文法知識の影響、学習者の母語である中国語の影響、「てくる」の各用法の特徴の影響を明らかにすると述べている。

第2章では、先行研究を概観し、先行研究で残された課題を整理した上で、本研究の課題を挙げている。まず、日本語学分野の「てくる」の用法分類に関する研究および「てくる」と中国語「V来」等との対照研究を参照した上で、本研究における「てくる」の分類枠を提示している。次に、日本語学習者による「てくる」の習得研究を参照し、残された課題をまとめている。その上で、本研究の研究課題として以下の4点を挙げている。

研究課題Ⅰ：日中対訳コーパスの共起頻度を基に、日中対訳関係の解析手法を模索し、「てくる」が中国語とどのような日中対訳関係を持つかを再検討する。

研究課題Ⅱ：I-JASを用いて、「てくる」を使用すべき場面において、学習者がどのような使用傾向を示すか、さらにその使用傾向が日中対訳関係にどのように関連しているかを明らかにする。

研究課題Ⅲ：学習者の日本語の語彙知識と文法知識が「てくる」の習得にどのように影響しているかを明らかにする。

研究課題Ⅳ：学習者の母語である中国語と「てくる」の各用法の特徴が「てくる」の習得にどのように関わっているかを明らかにする。

第3章では、研究課題Ⅰを明らかにするために、「てくる」と中国語「V来」等との対訳関係について再検討している。まず、日中対訳コーパスの共起頻度を基に「てくる」の対訳関係を明らかにした周（2019）の解析方法の妥当性を精査した。その結果、周（2019）を基に描かれたBiTスコアとBiMIスコアの散布図による分類は、「てくる」の9種類の下位構文と7つの中国語の表現類との対訳頻度から主要な対訳関係の基準を決めるという点で適当なアプローチであることが確認された。その一方で、この手法では取りこぼしてしまうケースがあること、当該コーパスにはそもそも「てくる」の頻度が多くないことから、すべての「てくる」が出現するケースを用いるほうがより厳密であるとの考えから、「てくる」と中国語「V来」等との対訳関係についてコレスポンデンス分析を用いて再度解析して

いる。それによって、「てくる」の空間移動用法における日中対訳関係が5つのパターンに分類できることを明らかにした。この5パターンの分類は、第4章以降の分析にも用いられる重要なものであるだけではなく、コレスポンデンス分析によって詳細な分類が行えたことで、「てくる」が中国語で「V来」に訳されやすい条件を明らかにすることに成功している。加えて、本章では「てくる」の空間移動用法だけではなく、逆行態用法やアスペクト用法でも下位分類用法ごとに多様な対訳関係が存在する可能性が示されるなど、新たな知見も提示されている。

第4章では、研究課題Ⅱを明らかにするために、学習者コーパス（I-JAS）を用いて中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の誤用分析を行っている。I-JASに収録されたデータから、日本語母語話者が「てくる」を使用している場面を抽出し、中国語を母語とする日本語学習者がその場面をどのように表現しているのかを比較したところ、中国語を母語とする日本語学習者が「てくる」を使用する頻度は日本語母語話者より低く、その代わりに中国語を母語とする日本語学習者は後続の機能語を伴わない本動詞タイプを多用していることが報告されている。さらに、中国語を母語とする日本語学習者に「てくる」が使用されやすいのは、中国語で「来」を含む対応類に訳されやすい用法であったことから、これらの結果は「てくる」の習得および産出には学習者の母語の影響が強く表れていることを示唆するものであるとしている。

第5章では、中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の習得に関わる影響要因の検証を行うために必要な「てくる」の理解を問うテストの作成と評価を行っている。ここでは、前章までの「てくる」の分類に基づいてテストデザインが決定され、問題文や選択肢構成に配慮した上でテストが作成されている。さらに、テストの有用性を検討するために、複数回にわたって日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者に対してテストが試行され、改善が加えられている。以上のような方法で妥当性・信頼性を確保した「てくる」テストの問題を第6章・第7章の検証研究で用いている。

第6章では、研究課題Ⅲを明らかにするために、「てくる」の理解に日本語の語彙知識と文法知識が与える影響を調査している。調査では、中国国内の大学に在籍する中国語を母語とする日本語学習者154名に対し、第5章で作成した「てくる」テスト、語彙テスト、文法テストを実施している。まず、「てくる」テストにおける各上位分類用法の正答率を比較したところ、空間移動用法＞アスペクト用法＞逆行態用法の順で正答率が高く、3つの上位分類用法の理解度には差がみられることを確認している。次に、語彙知識と文法知識それぞれの上位群・中位群・下位群で「てくる」各用法の理解度に差がみられるか、各用法の理解に語彙知識と文法知識がどの程度関連しているかを分析している。その結果、すべての用法の正答率と語彙テスト・文法テストの正答率の間に正の相関が見られたが、その相関の強さは用法によって差があると報告している。また、どの用法においても語彙知識・文法知識が豊富になると「てくる」の理解も進んでいるが、語彙知識・文法知識のどちらが理解に影響しているかは用法により異なることを明らかにしている。さらに、本調査で用いた「てくる」テスト、語彙テスト、文法テストのデータから「てくる」の理解に関わる因果関係モデルを検証し、海外の日本語教育環境での「てくる」の習得には「文法先行の逐次モデル」が最も適合すると論じている。

第7章では、研究課題Ⅳを明らかにするために、「てくる」の各中位/下位分類用法の習得状況を調査し、学習者の母語である中国語の影響を検討している。ここでは、「てくる」26項目について項目分析を行い、項目困難度（正答率）、実質選択肢数、各選択肢の選択率より「てくる」の各用法間の習得状況の違い、「てくる」と混同しやすい文型について考察している。その結果、中国語の「来」を含む対応類との対訳関係を持つ用法はそのような対訳関係を持たない用法より正答率が高いこと、特に空間移動用法においては、各中位/下位分類用法間で正答率に明確な違いがあることが明らかにされた。この結果の一部は、第4章の学習者コーパスを用いた中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の産出の傾向と一致しており、「てくる」の各用法の習得に中国語との対訳関係が影響していることをうかがわせる結果となっている。さらに、用法によって「てくる」との混同が起こりやすい文型に一定の傾向がみられることも明らかにしている。

第8章では、第7章までのまとめと総合考察、および本研究の結果から日本語教育へ示唆できることなどがまとめられている。上述のように、本審査対象論文は、中国語を母語とする日本語学習者の「てくる」の習得を定量的なデータを基に明らかにした実証的な研究である。本研究の中で使用されたデータおよび分析方法はいずれも新規性が高いもので、その点も評価できる。その一方で、中国語「V来」の先行研究について触れられていなかったり、例文が少なかったりするなど、論文として表現するという点において未熟な点も散見される。しかしながら、その点を考慮しても本審査対象論文で得られた知見が中国語を母語とする日本語学習者の習得研究に与えるインパクトは大きい。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で審査対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。